現代座 通巻 493 号　年４回（3月1日、6月1日、9月1日、12月1日）発行　　1967 年 2 月 18 日 第三種郵便物認可

共生のきずなを求めて！

NPO 現代座

2022 年 6 月 1 日　発行
（通巻 493 号）定価 100 円

# 現代座レポート　No. 90

・ＮＰＯ現代座「ブリンギン・ホテルにて」公演　（1）
・「ブリンギン・ホテル」について　木村快　（2）
・「お人形・わくわくシアター」の報告　（3）
・「われらいずこより来たる」（1965 年）木村快　（4-7）
・ちづる +One だふるライブ vol.4 に人形劇場「花かご」（8）
・会館日誌　会員入会・継続・寄付　（8）

NPO 現代座ホームページ　http://www.gendaiza.org/

特定非営利活動法人 ＮＰＯ現代座　発行責任者：木村快
〒 184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号　TEL 042-381-5165（代）　FAX042-381-6987

八木浩司

中村保好

木の下敬志

長谷川葉月

木下美智子

今村純二

黒澤義之

## ＮＰＯ現代座公演
## ブリンギン・ホテルにて

【配役】
昭和18年学徒兵出身の古賀良平　黒澤義之
有馬兵長　今村純二
吉永千里　木下美智子
ソフワット・和代　長谷川葉月
語り　木の下敬志
〃　中村保好
〃　八木浩司

【スタッフ】
脚本　木村　快
演出　八木澤賢
舞台監督　青木文太朗
照明　渋谷博史
〃　木村康恵
音響　矢川千尋
制作　東　志野香

ブリンギンとはインドネシアで「尊い命の樹」とされる樹木名です。

南太平洋に広がる広範な群島は17世紀以来、香辛料の産地として知られるオランダの植民地でした。インドネシア共和国はこの一帯の諸民族が言語、宗教、文化の違いを乗り越えて結集し、宗主国オランダと戦って１９５０年に自力で独立した非常に珍しい国です。

日本ではあまり知られていませんが、この独立戦争には多くの日本人が参加し、戦死者を出しています。独立の理念に共感した現地在住の民間人や日本軍兵士たちです。

１９５８年にインドネシア共和国のスカルノ大統領が訪日したとき、日本人の間ではほとんど独立戦争の事実が知られていないことを嘆き、インドネシア独立戦争で戦死した日本人指導者、市来龍夫と吉住留五郎への感謝の言葉として『独立は一民族のものならず全人類のものなり』と刻み、東京港区の青松寺境内に寄進しています。

イスラム教徒90％の国でありながら、憲法で信仰の自由を保証し、構成圏の各民族との共生を掲げる国づくりは、簡単なことではありません。現在考えなければならない、「全人類の課題」であるように思われます。

2022 年　7 月 7 日（木）8 日（金）9 日（土）10 日（日）11 日（月）
開演時間：午後 2 時
会場：現代座ホール
参加費　：一般　3500 円　学生　2000 円
完全予約制（自由席）：　TEL 042-381-5165　FAX 042-381-6987
MAIL:gendaiza.ticket@gmail.com
右記 QR コード（予約フォーム）
PC で予約フォームへは NPO 現代座ホームページ　gendaiza.org
Facebook ページ [Npo 現代座サポーターズ ]　@ganbaregendaiza

予約フォーム
QR コード

# 構成劇「ブリンギン・ホテルにて」

脚本・木村快

◆元日本兵が参加したインドネシア独立戦争

「ブリンギン」とはインドネシアで「尊い命の樹」とされる樹木名である。寺院の境内などに立っている。

私は1963年に「インドネシア訪問日本文化使節団」の一員として4ヶ月にわたってジャワ島全域を巡演したことがある。その時、いくつかの街で元日本兵の人たちに声をかけられ、日本の現状を尋ねられた。インドネシア独立戦争に参加した人たちだった。

インドネシア共和国は、宗主国オランダと4年間の独立闘争を繰り広げ、多くの戦死者を出し、1950年にやっと独立した国であることを知った。だが、その戦争になぜ多くの元日本兵が参加していたのか。

当時、インドネシアに進出し始めた日本商社の職員からは「ああいう連中とは接触しない方がいい」と忠告された。経済発展を目指す戦後の日本人にとって、元日本兵たちの存在は目障りだったらしい。

◆インドネシアは不思議な国

現在のインドネシア共和国は南太平洋一帯に広がる旧オランダ領植民地だった1万7千に及ぶ諸島の、宗教・文化・言語の異なる300以上の民族で構成されている。元々自分の国などなかった諸民族が共生を目指して試行錯誤しながら様々な問題を抱えている。

だがこの国がどう生きていくかは、現在、混乱を極めている世界の行く末を考える上で、貴重な教訓を含んでいるように思われる。

1974年に日本軍近衛師団本部のあったスマトラを訪ねたとき、独立戦争で戦没した元日本兵を弔う集会所があることを知った。実は独立戦争に参加した若い兵士には学徒兵出身者が多くいたという。昭和16年から18年にかけて、太平洋戦争開始前後に徴兵された世代は戦争に翻弄されつづけた世代である。私はそんな視点で戦争を考えたことはなかった。

◆「ブリンギン・ホテルにて」の概要

私の脳裏に一つの物語が育ち始めた。この作品に登場するドクター・コガこと古賀良平は、昭和18年の「学徒動員令」によって大学から陸軍補充兵に徴用された。そして戦争体験のないまま、オランダ領東インドのスマトラ島へ派遣される。マレー半島でイギリス軍との激戦を体験している古参兵たちからは「戦争を知らない坊やたち」と揶揄されながら屈辱的なスタートを切る。たまたま大学でドイツ文学をやっていたため、オランダ語の教習を受けて、日本軍が設立したインドネシア人「郷土防衛義勇軍」の教官になる。

そのときの上司が有馬兵長という有名な男だった。日本軍がスマトラに本部を設営したとき、有馬は日本からやってきた新任の将校から刀を抜いて脅された。有馬はその刀を奪い取り、逆に将校を追い回して師団の刑務所である重営倉にぶち込まれた。そのため昇級することはなく本隊から外されて、義勇軍に島流しされたのである。しかし有馬は他の教官と違ってインドネシア人と対等に接し、支える態度を貫いていた。

敗戦後、古賀はインドネシア独立戦争に参加するため日本軍を脱走するが、有馬は古賀を助けようとして復員船で帰国する機会を失い、共に独立軍に参加する。そして戦闘経験のない独立軍を助けつづけた。だが、オランダ軍との戦闘で意識不明の負傷を受け、消息不明となってしまった。その戦闘で古賀もオランダ軍の捕虜となり、昭和24年に日本に強制送還された。

古賀は帰国後、大学に復学して医師となり結婚。妻の一族が経営する病院の医師を勤めながらインドネシアからの帰国兵を訪ね歩き、有馬の消息を求めたが分からなかった。だが有馬探しを通じて、古賀は東南アジア医療の現状を知り、シニア・ボランティアとしてインドネシアの僻地医療に携わるようになる。

それから18年も経って、娘の千里がはじめてインドネシアに訪ねて来た。病院経営が危機に追い込まれているので助けて欲しいと言う。だが古賀は断らざるを得なかった。そんなやりとりの最中、アリと名乗る、熱帯雨林破壊の防止を訴える高齢のインドネシア人が訪ねてくる。探し求めていた有馬兵長だった。

古賀は有馬に改めて謝罪する。有馬は笑顔で「俺はインドネシア人として、熱帯雨林の破壊から小さな村を守るために行脚している」と語り、古賀は「ここに来てはじめて自分が医師としてこの世に存在することの意味を知った」と語る。

千里はそこに20世紀という残酷な時代を精一杯生きてきた世代の姿を見た。そしてできれば父に、このまま僻地で仕事を続けて欲しいと思った。

古賀の移住したインドネシア最北端の島スラウェシ島の街。

# 「お人形・わくわくシアター」の報告
## 【little ★銀河】と【腹話術師いずみ】ＮＰＯ現代座コラボレーション公演

２０２２年３月27日、３階小ホールにおいて「お人形わくわくシアター」を公演しました。

東京では前週までまん延防止重点措置が延長され、子どもたちに感染が広がっており、「安心して参加してもらいたい」と客席を20席に限定し、午前の部と午後の部の２回公演しました。おかげさまで満員御礼、無事終了しました。子どもたちの参加が午前の回に集中し、午後の回はほとんどが大人という客席でしたが、どちらの回も涙あり、笑いありで、盛り上がりました。

◆【little ★銀河（リトルギンガ）】の「双子の星」

little ★銀河は現代座に事務所を置く劇団スタジオ・ポラーノから生まれたユニットです。今回の「双子の星」は現代座会館で稽古を重ね、いざ上演というとき、コロナ禍に突入。発表の機会を失っていました。

試演会、オンライン配信は去年行いましたが、観客の前での公演は今回始めてです。ピアノの生演奏で誰もが知っている歌で始まり、楽しい仕掛けがいっぱいで客席は自然と星の世界に引き込まれます。

小さなお子さんが怖くなって泣いたり、心情を歌うシーンでは大人が涙したり。最後には晴れやかな笑顔と拍手で会場が満たされました。

◆【腹話術師いずみ】「SDGs の旅」

いずみさんは地元小金井のイベントや保育園・小学校・高齢者施設を回ったり、被災地でも活動しています。

企画当初はいずみさんは単独で公演するつもりだったのですが、せっかくだから little ★銀河と一緒にやってみようと言うことで、「双子の星」のキャラクターを組み込んだ内容になり、「けんちゃんの SDGs の旅」は、腹話術師いずみ〝初〟のお芝居形式の演目になりました。

年齢層が違った午前と午後では小さなエピソードを加えたり、「双子の星」で泣いてしまったお子さんへのフォローを入れたりと、流石の対応力でした。本題のお芝居に入るとさらに世界観も広がり、客席はすっかりいずみちゃんけんちゃんワールドに引き込まれていきました。楽しい笑いの中にもメッセージはしっかりと子どもたちに届いたようでした。

コラボだから、現代座も何かやろうということで、現代座作品の劇中歌「さようなら良い旅を」をエンディングとして出演者全員と現代座メンバーも入って歌いました。

終演後は出演者もマスクをして、お人形と写真を撮っていただける時間を作りました。ほとんどの方が出演者やお人形と交流しておられて、楽しんでいただけ、出演者も幸せそうでした。

◆アンケートより

◎舞台と客席との距離感が近くて親近感があって良かった。◎サソリ（人形）を動かしている人の表情が心に残り、音読とかする時に表情を意識してみようと思いました。◎歌、人形劇、芝居、紙芝居と多々一気に楽しむ事ができて得した気分。◎宮沢賢治の作品は難しい印象があるけれど、わかりやすく色々な仕掛けがあって楽しめた。◎大人も楽しめる内容で、「双子の星」で泣いてしまった。◎お腹から笑ったし、ホロリとしたし、感動しました。◎腹話術師いずみちゃんとけんちゃんの話が面白かった。SDGs について子どもがわかるように話してくれて良かった。◎もっと沢山の子どもたちに届けばいいなと思いました。

お孫さんと観てくださった方からの後日談。お孫さんがお家で「けんちゃんの SDGs の旅」で学んだことを率先して実践してくれているそうで、「親や学校から言われても興味無かったのが、いずみちゃんけんちゃんからのメッセージはすごく心に残るみたいで、しばらくずっと公演で観たことの話をしていた」そうです。動画配信サイトが豊富な時代ですが、やっぱり劇場はそれとは全く別の楽しみ、体験の場なんだと改めて感じました。

アンケートでも、お見送りの際にも何人もの方に、「また企画してください。定期的に子どもが観れるものをやって欲しい」と言われました。、また企画したいと思います。

（東 志野香）

木村ノート◆われらいずこより来たる 第2部
⑩ 1965年⑴ 世の中から捨てられた若者たち
木村　快

前回までの記述
【第1部】日本新劇史・資料からのまとめ
①・レポート81号　1950年、新劇運動の分裂
中間派は「ヴェリテ・せるくる」を設立。
②・レポート82号　1951年、新制作座の出発
ヴェリテ解散。真山、草村、槇村で新制作座。
③・レポート83号　1954年、庶民の新劇を標榜
労働組合関係者の支持で全国公演が始まる。
【第2部】活動に参加した木村快の視点から
④・レポート84号　1959年⑴特別研究所開設。
⑤・レポート85号　1959年⑵巡演活動の実態
⑥・レポート86号　1960年　安保闘争。
平和集会では国際的要人からも注目が集まり、
インドネシア共和国から招請される。
⑦・レポート87号　1963年⑴
インドネシア訪問日本文化使節団 の公演記録
⑧・レポート88号　1963年⑵
ユートピア・新制作座文化センター設立。
⑨・レポート89号　1964年
ユートピアの破綻・劇団員・従業員の首きり。

## 1965年⑴　世の中から捨てられた若者たち

◆人権無視の強制追放

信じられない出来事だった。すでに前号で紹介したことだが、都心に拠点を置いていた新制作座が、1963年に労働運動との連携で政府から1億5千万円の福祉資金融資を受けて、八王子市元八王子の山間部に巨大な新制作座文化センターを建設した。

以後、新制作座は全寮制度となり、180人の劇団員・従業員が移住してきた。それが1年半たった1964年12月25日のクリスマスの日、若手劇団員が集められ、「これから名前を呼ぶ人は、この場で辞めてもらいます。以後、文化センターへの出入りは禁止します」と告げられた。集まった劇団員は何事が起こったのかもわからず、ただ呆然とするだけだった。

その2日前の23日には突然「センターの宿舎は民間人が使用することになったから、すぐ宿舎を出てセンターの敷地外で下宿先を見つけるように」と命じられ、健康保険証も書き換えがあるからと取り上げられていた。これは何か大変なことが起こるのではないかとは思っていた。その日は大騒ぎで元八王子一帯で下宿を探しまわり、取りあえずいくつかの貸間を見つけ、当面は4、5人ずつ詰め合わせて年を過ごすことにした。

それにしてもまさか年の瀬も迫ったこの時期に、突然解雇手当も支給せずに強制追放するとは信じられないことだった。劇団側としては地方出身者が多いから、この年末なら諦めてそれぞれ故郷へ立ち帰るだろうと踏んでいたようだ。

こうした一方的排除が始まったのは、9月に若者が集められ、「言いたいことがあれば何でも言っていい」という集会が開かれ、そのときの発言から排除すべきメンバーが選別されたらしい。そしてまず10月に木村快、宮城信二ら8名が強制追放された。そして年末押し迫っての追放だった。

この年は新幹線が走行を始め、日本中が東京オリンピックの開催に歓呼の声を上げていた。だが、元八王子地区界隈に放り出された若者たちは途方に暮れていた。八王子市街まで出るのにバスで20分、歩くと40分以上かかった。近くに6畳と4畳半と二間続きの部屋を借りたメンバーがいたので、そこにぎっしり70名が集まり、どうしたものかとワイワイやっていた。

◆拠点を作れ

これも前号で紹介したが、正劇団員の8名は劇団が労働金庫から資金繰りのためにつくった労働組合に登録されていたから、木村快が舞台芸術家組合に「どうすれば良いのか」と問い合わせた。組合は「なんとか年明けまで頑張ってくれ、必ずバックアップ体制を作るから」と言うので、とにかく年明けまで頑張ろうということになった。

ある程度劇団の実情を知り、規約上発言権を持つのは正劇団員8名しか居ないので、まず8名で検討を始めた。とにかく目途がつくまで、元八王子地区一帯に投げ出された70名がまとまって居なくてはならない。

そこで、まとまるための拠点を作ろうという話になった。すると下宿探しで歩き回っていたメンバーから、この奥の谷間の崖下に、誰も住んでいないアパートがあるという話が出た。そこで下見した上で、家主と折衝して、とりあえず3ヶ月間借入することにした。ここなら10分から15分で集まることができたからだ。

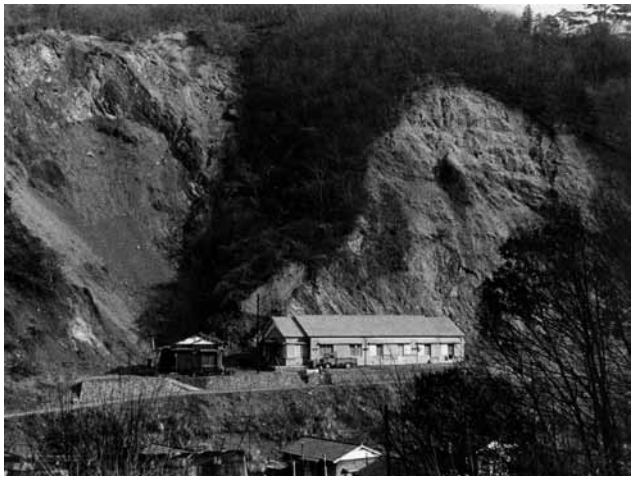
◆生き抜くための単一経済

住んでる地域ごとに班をつくり、どんなことでもみんなで話し合って、それを班の代表者が拠点に集って検討する。拠点には6畳の間が10室あったから、本部事務局、応接間、談話室、療養室、それに食堂と台所を設置することができた。

みんなが散在して住んでいる家賃は本部から支払うことにした。食事は全体を一括でつくり、それぞれが必要なだけ食べる方式を編み出した。療養者が4人いたので医療費、療養費も全体で支払うことにした。

そこでまず無記名で生活資金を集めてみた。集めてみたら70万円しかなかった。これでは全員が生きて行くには一ヶ月も持たない。実は全く出せない者も何人かいたし、逆に9万円も出した者もいるらしいことが分かった。

「散髪はお互いに苅り合おう」「女性の髪型も格好のいい断髪にしてはどうか」「活動用の衣装も融通し合おう」などワアワア笑いながら様々な意見が出る。



★拠点は崖の下　この時期、八王子界隈は人口も増え、新しい住宅がどんどん建っていた。そのためか、谷間の奥の崖下に10部屋もある空き家のアパートがあった。家主を探し出し、３ヶ月間の臨時契約を結んだ。

個人的な趣向品やタバコなど、個人が自由に使う金も必要だから、個人に渡す金は1人月１０００円以内で工夫することにした。不思議なことに、これがみんなの気分を沸き立たせた。そしてこのやり方を「生き抜くための単一経済方式」と名付け、年明けまではみんなで体制づくり、拠点づくりに励んだ。

1月3日、年も明けて、戦いのスタートを切る集会を開いた。70名も集まる場所はないので近くにある多摩御陵の空き地で、心を一つにするために歌でも歌おうということになった。寒かったが、誰もいない森に囲まれた空き地で、お互いの顔を見つめ合いながら大合唱をくり広げた。ここまではみんな元気だった。

◆社会の谷底に突き落とされて

1月8日、映演総連事務局（映画演劇労働組合総連合）から呼びだされた。映演総連は新制作座に「多少の解雇手当を出してでも、和解してはどうか」と打診していたが、新制作座は東京中日新聞夕刊に新制作座争議のスクープ記事が出ることをつかみ、和解を拒否して築地の「歌舞伎座」で記者会見を開いているという。

そこで急遽、映演総連でも記者会見を開くという。何がなんだかわからないまま総連幹部の指導に従って「新制作座不当解雇反対争議団」なるものを結成し、責任者を決めていなかったのであわてて話し合い、舞台芸術家組合と相談していた木村快を中心に記者会見に出ることになった。何の準備もないままなので、記者の質問に対してはしどろもどろしながら、一生懸命ありのままを語った。

◆森の中で歌え　1月3日、

寒風吹きすさぶ多摩御陵の空き地に集まった。とにかくお互いの顔を見ることが必要だった。これからどうするかは、歌いながら考えることにした。若いメンバーも歌や踊りを中心にしたチームで活動していたから、戦いの準備として全員で合唱することにした。木村も久しぶりでアコーディオンを弾いた。

そして各新聞は一斉に報道を開始する。その結果、ほとんどが劇団側の主張する「秘密組織をつくって劇団の乗っ取りを策していたから解雇した」とする記事だった。若者たちを都心から山奥の集団生活に移住させながら、突然放り出したのだから重大な人権問題であるはずだが、若者たちの人権などそっちのけで「今どきの若者の身勝手な反乱事件か～常識では理解できない不思議な事件」として報道されただけだった。

新制作座は労働組合に加入する職業劇団とは言え、一般企業とは全く性格が違うし、芸術集団として見てもテレビ映画に出演する一般の劇団ともまるで違っていた。しかし文化センターの建設が話題を集めていたから、マスコミとしては絶好の話題だった。しかし劇団側の説明に頼り、解雇された側の取材をしない記者たちには、捉えどころのない異文化社会の出来事に見えたようだ。サンケイ新聞系の記事は政党の下部組織が、劇団内に入り込んで独走したかのような書き方までしていた。

争議団ができたのだから、せめて労働組合からどんな反応が出るかと期待したが、ほとんど反応はなく、このまま押しつぶされるかもしれないと覚悟した。

### 1965年1月の新聞記事のタイトル

◎1月8日　中日新聞・朝刊　新制作座で解雇騒ぎ
　アンサンブル乱した分子、活動への影響はなし
◎1月8日　中日新聞・夕刊　劇団員67人を解雇
◎1月9日　サンケイ新聞　新制作座で内紛　首謀者ら6人に
　退団処分
◎1月9日　サンケイ・スポーツ　劇団内に秘密組織
　新制作座で大量処分
◎1月9日　日刊スポーツ 新制作座のお家騒動 処分撤回運動
　退団者などが争議団結成
◎1月9日　毎日新聞　新制作座大ゆれ
　67人のクビ切りで対立
◎1月14日　朝日新聞・夕刊　奇妙な争議　ゆれる新制作座
　劇団にベトコン　真山天皇の批判飛ぶ
◆週刊文春　真山美保一座クビ切り顛末記
　団結を誇る新制作座で67人が処分された事情
　「金のことを言い過ぎる」
◆週刊サンケイ　新制作座の分裂劇・秘密組織とユートピアの
　内側 67人が劇団失格、独走しすぎた下部組織
◆週刊新潮　グラビア特集「現代の顔・私たちは帰りたい」
　新制作座を追われた69人の暮らし

◆「訴え班」の活動を展開

劇団の巡演活動は集団生活が基本で、分刻みでの集団移動、舞台設営、開演、舞台撤去、観客との交流会、宿での食事。大劇場でも上演したし、小学校の講堂でも上演していた。その時その時で創意工夫をこらさなければならないし、少々の不満があっても方針が決まればみんなでそれをやってのける自律的な行動力を身につけていた。

解雇された劇団員は経歴6年以下だったが、巡演活動の主力だったから、自力である程度のことができるのではないかと模索していた。

「そうだ、もうマスコミなんかに頼らず、自分たちで訴えて歩こう」

「訴え班」は5人1組のチームを5班作った。

（上）職場を訪ね、昼休みの労働者たちに歌や踊りを見て貰う。
（下）日雇い労働者の「寄り場」で踊る。

そして「訴え班」のために各地の職場を訪ねて、昼休みに歌やコントをやらせてほしいと交渉する準備班が各地に散った。その手引きで、「訴え班」は東京、中部、関西圏の工場をたずね歩いた。

休憩中の労働者相手に、「自分たちは身勝手な反乱分子として報道された人間です」と自己紹介してから、歌ったり踊ったりして訴えた。怪訝な表情で見ていた人々もやがて喝采し、共に歌いながらカンパを差し出し、知り合いの労組や集まりを紹介してくれるようになった。

適当な場所があれば公園でも街頭でも歌い踊った。未熟な芸に見ず知らずの人々が喝采し、投げ銭を与えてくれた。それは若者たちの一生懸命生きる姿が共感されたからだろう。こうして1月から8月までの間に各地で676回の訴え活動を展開している。

◆いつまで続けるのか

（１９６５年　木村快の手記から）

この争議はいつまで続けられるのか。メンバーの３分の２が舞台歴４年未満の若者である。彼らの将来を潰すことにならないか。いつもみんなの後ろにいたはずの私が突然リーダーに押し上げられたため、内心どんな形での終結を提言すればいいのかと悩んでいた。

そんなとき、ある労働組合の集会から声がかかった。まだ経験の浅いメンバー５人が出演することになった。いよいよ出番がきて、５人はさっそうと舞台に登場した。狭い会場で、人いきれのムンムンする客席から大きな拍手が湧き起こった。

こういう場に慣れない彼らは緊張していた。一人のメンバーがすすみでて挨拶をはじめた。見よう見まねで労働者の集会にふさわしい挨拶をしようとしたのだが、用意していた言葉をど忘れしてしまって、途中から立ち往生してしまった。私も彼らにつきそってきて客席にいたのだが、青くなってしまった。彼はひたいから汗を流し、必死になって言葉を思い出そうとしていた。

「どうした！」会場から声がかかった。彼はますます立ち往生する。

「がんばれ！」、「そういうときは深呼吸をする！」と、また弥次がとんだ。

すると彼はピョコンとおじぎをしてから深呼吸をした。すると会場は爆笑した。彼は「どうもすみません」と言った。するとまた爆笑が起った。

「よし、気持ちはわかった。早く歌をやれ！」

彼は「ハイ、では歌います」と言って後方の４人の方へ戻る。するとまた笑いが起こる。

レパートリイはこの集会に出演するために、昨夜ほとんど徹夜で踊りを振りつけたものであった。若者らしい奇抜さで、アコーディオンを弾きはじめると同時に、他の４人が勢いよくパッととびあがることになっていた。呼吸を合わせ、４人がパッととびあがった。するとどうしたことかアコーディオンが鳴らない。アコーディオンも以前ピアノを少々やったことがあるという程度の急造の弾き手で、若い女性だった。彼女はアコーディオンの蛇腹の留め金をはずしていなかったのだ。他の４人は何ともバツの悪そうな顔をして立っている。

そこでもう一度最初からやり直すことになった。呼吸を合せて４人がパッととびあがった。アコーディオンも勢いよく鳴った。今度は巧くいったと思ったら、またアコーディオンの音が止まった。今度は蛇腹の下の留め金をはずしていなかったのだ。会場は爆笑につぐ爆笑で、舞台の５人は顔面蒼白だった。

「そういうときは深呼吸をする」、今度は２、３か所から声がとんだ。もう目茶苦茶だった。しかし５人は必死でまた頭からやり直した。その時会場がシーンとした。そして今度は大丈夫だとはっきりしたとき、万雷の拍手が湧き起こった。なんと暖かい人たちだろう。わたしは目頭が熱くなった。

会場中が舞台に一喜一憂していくうちに、いつしか全体がまるでひとつに溶け合って、それからというもの何をやっても爆笑、手拍子、そして万雷の拍手だった。

◆劇場の発見

未熟な俳優の醜態が、なぜあのように感動的な劇場を生みだすのか。私は大きな衝撃を受けた。私はアコーディオン奏者として、脇役ながら常に舞台に立っていたから、観せる技術がどんなに難しいことかを知っていた。だから経験未熟な自分たちで独自に活動を展開するのは無理だと思っていた。

だが観客は私たちの醜態を目撃し、腹をよじらせて笑っていた。冷笑したのではない。それが証拠に三度目にやっと演奏が流れだした時は、まるでわがことのように歓声をあげ、熱い拍手を送っていた。つまり観客は私たちが俳優であることを忘れて、いつの間にか身内の仲間として見ていたのだ。身内として見ると、醜態でさえもあんな暖かい劇場を生みだすのか。

そうだ。それなら観客の身内になれないか。みんなを喜ばせることに専心して、観客を身内にしてしまうのだ。それは一つの啓示だった。

あの舞台はミスの連続だったが、それだけにみんな必死だった。身内の観客たちはそのミスをいっしょになってかばおうとした。そうすることで知らぬうちに観客自身が熱い連帯をつくりだしていたのだ。観客は場合によっては自ら感動をつくりだす。

すると観客の状態、つまり劇場という集団的な状態に何か特有の秘密があるのではないだろうか。それなら観客にとって身近な題材を取り上げ、観客自らが人間的な感動を生み出すような芝居をつくれないだろうか。そのための専門家になる道はないだろうか。自滅さえ覚悟したのだから、何かできるかもしれない。

私は変に大人ぶって終結の仕方を考えていたが、それはかえって、みんなの将来への可能性を押しつぶすことになったかもしれないと思いはじめた。

やはり私もみんなと一緒になって、やってみようと思った。

【以下次号】

## ちづる＋Oneだふるライブvol.4
### ゲスト・人形劇場「花かご」

人形劇場「花かご」が、今回ピアニスト秋山ちづるさんのライブにゲストとして参加し、現代座3階小ホールで8月27日（土）にお目見えすることになりました。

「花かご」は1983年に現代座の母親劇団員が発足させた人形劇や児童劇を演じるグループです。今は現代座から独立して、新しいメンバーも加わり各地の保育園や幼稚園・こども園で公演しています。

秋山ちづるさんは昭和音楽大学、ドイツ国立リューベック音楽大学ピアノ科卒業のピアニストです。帰国後、作曲家安達元彦氏と出逢い、それまでの音楽観が転換、民謡のピアノ伴奏アレンジにも挑戦しています。いつもは音楽家や俳優のゲストを迎えてのライブですが、今回は人形劇というはじめての出逢いです。

「花かご」にとっても子どもたちに楽しんでもらう人形劇だけでなく、新しい「花かご」を見てもらうチャンスだと、歌やコントにも挑んでいます。

いつもは立川の「アートルーム新紀元」で行われるライブですが、現代座の3階小ホールでもやってほしいとお願いしました。久しぶりの、そして新しい「花かご」を是非ご覧ください。

（木下美智子）

木村康恵　菅野佳代子　真知尚子　熊倉正博

ピアニスト　秋山ちづる

8月27日（土）現代座3F小ホール
開演時間　①13：30　②17：00
参加費　大人3000円
　中高生1000円　子ども500円

【問合せ】
すがの：090-4525-7880
ryou-sou.mama@i.softbank.jp
あきやま：080-6527-8196
caglueck27@hotmail.com
◆9月3日には立川「アートルーム新紀元」でも同じ時間帯で上演します。

---

### 現代座会館2022年3月～5月　活動日誌

3月20日　「現代座レポート89号」発送作業
28日　ＮＰＯ現代座会議
4月16日　ＮＰＯ現代座会議
　第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】
3月19～21日　「青春の庭のうさぎたち」公演
4月21～30日　「劇団影法師」稽古
5月8日　「スタジオ・ポラーノ」稽古
　16～22日　「STEPS」公演
5月30、6月4～6日
　現代座「ブリンギン・ホテルにて」稽古

【三階小ホール】
3月6日　「津田リトルコンサート」
13日　「ゲテ演隊Ｋユニット」稽古
26、27日　「お人形わくわくシアター」
4月23日　「武蔵野朗読会」おさらい会
24日　「ゲテ演隊Ｋユニット」稽古
5月1、8日　「ゲテ演隊Ｋユニット」稽古
13～15日　「ゲテ演隊Ｋユニット」公演
22日　緑町第2町会総会
28～29日
　現代座「ブリンギン・ホテルにて」稽古
　隔水曜・木曜日　朗読教室
　毎火曜・木曜日　ヨガ教室

【二階サロン】
3月23日　岡田京子塾
4月17日　緑町第2町会役員会
5月7～10日
　現代座「ブリンギン・ホテルにて」稽古
　毎水曜日　熟年パソコンサークル
　隔木曜日　ipad熟年講座

---

ＮＰＯ現代座の会員になってください
●年間４回発行の活動レポートをお送りします。
●会員による企画行事をお知らせします。
●お申し出があれば、上演舞台の録画ＤＶＤをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）
一般会員　　3,000円
協賛会員　　10,000円（１口以上）
郵便振替口座番号　00110-7-703151　ＮＰＯ現代座